様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０２
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３２０１５２

研究課題名（和文）ユーラシアにおけるユダヤ現代史の比較研究

研究課題名（英文）Comparative studies in Eurasian Jewish History

研究代表者
高尾　千津子（Takao, Chizuko）

東京医科歯科大学・教養部・教授

研究者番号：００２４７２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はロシア革命後ユーラシアの東西に離散した亡命ロシア人社会と、それに付随して世界に拡散したロシアの「ユダヤ人問題」と反ユダヤ主義の諸相を、満洲、極東に焦点を当てて考察した。特にシベリア出兵期に日本に伝播した反ユダヤ主義、日本統治下満洲における亡命ロシア人社会とロシア・ファシズムの発展、シベリアと満洲におけるシオニズム運動の展開、ホロコースト前夜のユダヤ難民問題における日ソ両国の役割を解明した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the Russian refugees from the 1917 Russian revolution and Civil War, and Russian Jewish questions and anti-Semitism in Manchuria in interwar period. Particularly, we explore the anti-Semitism that spread to Japan during the period of the Siberian expedition, the development of Russian fascism in Manchuria under Japanese rule, and the expansion of Zionist movement in Siberia and Manchuria. This project also aims to clarify the role played by Japan and the Soviet Union in the Jewish refugees question on the eve of the Holocaust.

研究分野：ロシア史

キーワード：ユダヤ人問題　亡命ロシア人　ハルビン　ロシア・ファシズム　シオニズム　反ユダヤ主義

１．研究開始当初の背景

ロシア革命と内戦期のハルビンは、亡命ロシア人の政治、文化の一大中心となる一方で、反革命派の拠点となった。戦前の日ソ関係の焦点であった満洲は、日本帝国が初めてユダヤ人社会を統治下に置いた土地であり、日本人のユダヤ人認識の揺籃と発展の地でもあった。1930 年代日本統治下のハルビンは革命前のリベラルさとは一転し、亡命ロシア人文化の衰退、日本軍、外交当局の反ユダヤ主義といった否定的側面が指摘されてきた。たしかに満洲国では軍の保護下でユダヤ人を敵視するロシア・ファシスト党が跋扈し、同党による一連のユダヤ人拉致殺害事件（特に「カスペ事件」）が発生、日本の外交当局を悩ます国際問題となるに至った。だがこれと同時に満洲ではユダヤ人のナショナリズムであるシオニズム運動もまた保護され、中でも修正主義シオニズムの強まりに見られるように独自の発展と展開を見せた点はほとんど知られていない。ハルビンでは複数のユダヤ系ロシア語雑誌が日本の敗戦前後まで刊行された。ロシア語によるユダヤ系雑誌は当時ソ連にもたった一誌『演壇』（1937 年廃刊）しかなかったのであり、ハルビンはロシア・ユダヤ文化の特異な「飛び地」であった。だがパリやベルリンといった「亡命ロシアの首都」から遠く離れたハルビンの重要性は、ユダヤ現代史ではほとんど認識されていない。同時に「亡命ロシア」という表現の下に隠れた多様な民族アイデンティティと内部の葛藤も、近年になってようやく研究の端緒が開かれたにすぎない。

本研究計画の直接の背景は、平成 21 年度に始動した科研基盤（B)「ユーラシア・ユダヤ現代史の構築」（代表者高尾千津子）である。このプロジェクトは、日本のロシア東欧史研究者とユダヤ現代史研究者による初の共同研究として始まった。本研究はこれをさらに発展させ、ロシアと日本の「辺境」として歴史的な衝突の舞台となった極東および満洲の「ユダヤ人問題」を中心軸とし、ヨーロッパ、バルト諸国、ソ連西部と比較することでユダヤ現代史に日本独自の貢献を行う。

２．研究の目的

本研究の目的はロシア革命から第二次世界大戦期のユーラシアにおけるユダヤ人の動向を地域横断的に明らかにすることである。１）ヨーロッパ・ロシアからシベリア、極東へ、さらに大陸から日本へと伝播した反ユダヤ主義と「ユダヤ人問題」を多角的、総合的に分析し、２）革命後様々な政治運動を繰り広げた亡命ロシア人社会の経験を比較し、日本統治下の満洲、特にハルビンにおけるロシア系ユダヤ人ディアスポラと日本当局との関係を検討する。さらに３）ホロコースト前夜のシベリア経由日本、上海へのユダヤ難民問題に関する日本、ロシア、その他関係各国の史資料を収集、分析、比較することで、ホロコーストと日本に関するより客観的な歴史像の構築を目指す。以上の三つの軸を設け、ユーラシア東西のユダヤ現代史を比較・検討する。

３．研究の方法

研究方法は主にロシア、アメリカ、ヨーロッパ、イスラエル、日本の各地に分散する史資料の調査、収集を中心とするフィールドワークとその分析であり、これらの成果を国内外の研究会および国際会議で発表し、意見の交換と情報収集を行う。かつ海外から研究者を招聘し、ワークショップや講演会を開催、情報を収集する。

（1）シベリア、極東、満洲の「ユダヤ人問題」の諸相

内戦期から 20 年代ロシア極東と満洲における革命と反革命、情報戦、反ユダヤ主義を総合的に検討する。

（2）戦間期ユーラシアにおける亡命ロシア社会の比較研究

日本統治下ハルビンの亡命ロシア人社会の政治活動を、ユーラシア各地の亡命ロシア社会と比較検討する。

（3）ホロコースト前夜の日本のユダヤ難民政策の再評価

第二次大戦勃発の前後においてヨーロッパからソ連経由のユダヤ難民受入国となった日本の難民政策を、多角的な史料を用い、国際的な視点から分析を試みる。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

極東、満洲、東アジアにおける「ユダヤ人問題」と反ユダヤ主義をめぐる亡命ロシア人社会と日本との関わりを中心に、代表者、分担者は、後掲の雑誌論文、学会発表、単行書などに発表した。これらの研究成果の一部は以下の通りである。

①日本への反ユダヤ主義の伝播に決定的影響を与えたのは第一次世界大戦とシベリア出兵であった。大戦と出兵を契機にユーラシア東西、すなわち極東ロシアとヨーロッパ経由でいわゆる「ユダヤ陰謀論」が日本に流入した。20 世紀初頭にロシアでねつ造された偽書『シオン賢者の議定書』は、ロシア革命後、「ユダヤ陰謀論」の「証拠」として世界各地に伝播し、戦間期の欧米諸国における反ユダヤ主義に大きな影響を及ぼした。最初に邦訳された『議定書』（『過激主義ノ真髄』1919 年）は、翻訳者によるウラジオストク現地での観察や反ユダヤ的解釈や、シベリアへ共同派兵を行ったアメリカに対する不信や敵意が随所に見られるなどの興味深い特徴がある。『議定書』は翻訳された直後から日本の

言論界で内容の真贋をめぐって賛否両論を巻き起こした。日本への『議定書』伝播がだれによってなされたかは諸説あるが、日ロ双方の一次史料を検討した結果、極東最後の白衛軍政府であった「沿アムール臨時政府（1921-1922 年)」首班のスピリドン・メルクーロフとシベリア派遣軍通訳官で陸軍幼年学校教授の樋口艶之助が中心的役割を果たした点を明らかにした。また、内戦下においてシベリア、極東に反ユダヤ主義が波及する背景には、英、仏、米、日本の派遣軍内の対立もまた反ユダヤ主義の醸成に一定の役割を果たしたものと思われる。

②ロシア革命と内戦を経て、極東の都市ハルビンは亡命ロシア人の政治、文化の一大中心であると同時に反革命派の拠点となった。1930 年代のハルビンでは、ユダヤ人を敵視するロシア・ファシスト党が組織される一方、ユダヤ人のナショナリズムであるシオニズム運動は極東で独自の発展と展開を見せることになった。多様な政治運動を繰り広げた亡命ロシア人社会におけるロシア・ファシスト党の生成と発展およびその特徴と極東におけるファシズムのあり方を考察した。ハルビンのロシア・ファシズムは多様な潮流から構成されていたが、次第にドイツ・ファシズムの強い影響を受けて発展した。同時代の他国のファシズムとの相違とは、ロシア・ファシズムが国家という土台を持たない理念的なファシズムであったということ、また日本軍部とのかかわりが、ロシア・ファシスト党の発展に大きく寄与すると同時に、同党の活動を大きく制約したことである。ファシスト党によるユダヤ人資産家誘拐事件、なかでも 1933 年に発生し国際的スキャンダルとなった「カスペ事件」でユダヤ人カスペを拉致殺害したファシスト党員は、逮捕、裁判の末に全員無罪となった。ファシスト党による一連の誘拐事件には関東軍憲兵隊、特務機関が深く関与していた。また 1934 年末にロシア・ファシスト党員を中核として「白系露人事務局」が組織され、亡命ロシア人社会を対ソ戦略に利用するという関東軍の基本構想の下で、ファシスト党による過激な反ユダヤ主義運動が一時的に許容された。カスペ事件が決着し、軍とファシスト党との共犯関係が集結した後の 1937 年、軍当局は対ユダヤ人宥和政策に転じることになった。満洲国における亡命ロシア人社会の多様性、分裂と葛藤、反ユダヤ主義は、日本の満洲統治におおいに反映されていた。

③ロシア・ホロコースト研究教育センターのイリヤ・アルトマンの協力により、第二次世界大戦中のソ連経由日本へのユダヤ難民問題関連ロシアにおける未公開資料の調査収集を行い、この成果は、平成 26 年にロシアの現代史雑誌に Праведник народов мира Чиунэ Сугихара// Новая и новейшая история(2014, No.5)として掲載された。平成 26 年 12 月にアルトマンをモスクワから招聘し、早稲田大学ヨーロッパ文明史研究所と日本ユダヤ学会の協賛で早稲田大学にて「杉原千畝　新資料と新たな事実」と題し公開講演会を行った。本公演では旧ソ連文書館及び周辺諸国の杉原千畝関係史料の公開の現状ならびに判明した新たな事実について最新の研究成果報告がなされ、国内の研究者との研究交流が行われた。

（2）研究成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究主題の特徴は、ロシア極東、満洲における日ソ間の軍事、外交的な競合を背景とした「ユダヤ人問題」と亡命ロシア人の関係を内外の文書館史料調査を通し明らかにしたことであり、日本語、ロシア語の史資料と研究を比較検討した研究成果を内外の国際会議や学会で発表した。

①平成 25 年 7 月の第 16 回世界ユダヤ学会議 The 16th World congress of Jewish Studies（エルサレム、イスラエル）では、Russian Jews and Borders: Far Eastern Perspectives, 1910s-1930s と題するパネルを組織し、代表者および分担者の 4 名がそれぞれ帝政末期から 1930 年代までのシベリア、極東、満洲における「ユダヤ人問題」を廻る研究成果を発表した。欧米、イスラエル、ロシアのユダヤ史研究者との意見交換を行った。

②カリーニングラード（ロシア）で平成 25 年 11 月に開催された「水晶の夜 75 周年」シンポジウムでは高尾が戦前日本におけるユダヤ難民政策を発表し、ロシアおよび欧米の研究者との交流を行った。

③平成 26 年度の日本西洋史学会では「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の波及：ユーラシア現代史への視座」と題し小シンポジウムを開催し、代表者と分担者 4 人が最新の研究成果を報告した。ヨーロッパの反ユダヤ主義については、これまでに内外で研究の蓄積があるが、第一次世界大戦とロシア革命を起点とする反ユダヤ主義が、ユーラシア東西で連動性を持つものであることを明らかにする事ができた。これらの研究成果は日本ユダヤ学会誌『ユダヤ・イスラエル研究』29 号(2015 年秋発行)に特集として掲載される予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　12 件）

①<u>高尾千津子</u>、「戦前日本のユダヤ認識とハルビン・ユダヤ人社会」、『一神教学際研究』、査読なし、10 号、2015 年、25-39 頁。

②<u>宮澤正典</u>、「昭和戦時下における新聞の親ナチ・反ユダヤへの傾斜―それに同調しなかった人々」、『一神教学際研究』、査読なし、

10 号、2015 年、7-24 頁。
③中嶋毅、"Forming the Russian Fascist Party in Harbin 1925-1933"，『人文学報』査読なし、505 号、2014 年、1-19 頁。
④中嶋毅、「カスペ事件をめぐる在哈ロシア人社会と日本　1933-1937」、『人文学報』、査読なし、490 号、2014 年　33-63 頁。
⑤野村真理、「ナチ支配下ウィーンのユダヤ人移住におけるウィーン・モデルとゲマインデ」、『ユダヤ・イスラエル研究』、査読有、28 号、2014 年、24-34 頁。
⑥小森宏美、「再国民化と脱国民化に直面するエストニアの歴史教育―教科書比較の視座から」、『早稲田教育評論』査読有、29 巻 1 号、2014 年、151-165 頁。
⑦高尾千津子、「シベリア出兵とシオン議定書の伝播　1919-1922」、『ユダヤ・イスラエル研究』、査読有、27 号、2013 年　23-36 頁。
⑧原暉之、「日露戦争期のサハリン難民とロシア政府の救恤政策」『ロシア史研究』、査読有、91 号、2012 年　3-22 頁。

〔学会発表〕（計　16 件）
①高尾千津子、「内戦期ロシア極東の「ユダヤ人問題」と反ユダヤ主義」、第 64 回日本西洋史学会小シンポジウム、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京）
②中嶋毅、「ロシア・ファシスト党の形成と拡大―ハルビンの事例から」、第 64 回日本西洋史学会小シンポジウム、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京）
③野村真理、「満洲―ロシア人・ユダヤ人・日本人の交錯」、第 64 回日本西洋史学会小シンポジウム、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京）
④鶴見太郎、「ロシア・シオニズムの亡命―ハルビンにとどまったシオニスト」、第 64 回日本西洋史学会小シンポジウム、2014 年 6 月 1 日、立教大学（東京）
⑤高尾千津子、Japan and Jewish Refugee Question:1938-1941, VIII International Conference: Lessons of the Holocaust and Contemporary Russia, 2013 年 11 月 16 日、イマニュエル・カント国立大学（カリーニングラード、ロシア）
⑥高尾千津子、Siberian Intervention and the Protocols of Elders of Zion in Japan, The 16th World Congress of Jewish Studies, 2013 年 7 月 30 日、ヘブライ大学（エルサレム、イスラエル）
⑦中嶋毅、The Kaspe Affair and the Japanese Consulate in Harbin, 1933-1937, 16th World Congress of Jewish Studies, 2013 年 7 月 30 日、ヘブライ大学（エルサレム、イスラエル）
⑧宮沢正典、「日本人のユダヤ認識―杉原ビザの背景」2013 年 5 月 23 日、港湾政策研究所、敦賀市プラザ萬象大ホール（福井）
⑨野村真理、「未完の戦争：東部戦線によせて」第 63 回日本西洋史学会小シンポジウム、2013 年 5 月 12 日、京都大学（京都）

〔図書〕（計　16 件）
①高尾千津子、東洋書店、『ロシアとユダヤ人―苦悩の歴史と現在』2014、64 頁。
②野村真理、人文書院、『隣人が敵国人になる日―第一次世界大戦と東中欧の諸民族』2013 年、150 頁。
③高尾千津子他、ミネルヴァ書房、『満洲におけるロシア人の社会と生活』2013 年、307 頁（248-270 頁）。
④中嶋毅、山川出版社、『新史料で読むロシア史』2013 年、340 頁。
⑤ウルフ・デイビッド他、ミネルヴァ書房『アジア主義は何を語るのか』2013 年、696 頁（562-583 頁）。
⑥高尾千津子、中嶋毅他、成文社、『満洲のなかのロシア』2012 年、299 頁（67-92 頁、205-219 頁）。
⑦高尾千津子、中嶋毅、塩川伸明他、東京大学出版会、『ユーラシア世界 2　ディアスポラ論』2012 年、265 頁（79-103 頁、107-130 頁）。
⑧小森宏美、ウルフ・デイビッド　他、東京大学出版会、『ユーラシア世界 5　国家と国際関係』2012 年、263 頁（95-117 頁、207-225 頁）。
⑨野村真理、世界思想社、『ホロコースト後のユダヤ人―約束の土地は何処か』2012 年、181 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者
高尾　千津子（TAKAO, Chizuko）
東京医科歯科大学・教養部・教授
研究者番号：00247264

(2)研究分担者
野村　真理（NOMURA, Mari）
金沢大学・経済学経営学系・教授
研究者番号： 20164741

小森　宏美（KOMORI, Hiromi）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：50353454

中嶋　毅（NAKASHIMA, Takeshi）
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：70241495

原　暉之（HARA, Teruyuki）
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・名誉教授
研究者番号：90086231

鶴見　太郎（TSURIMI, Taro）
埼玉大学・研究機構・研究企画推進室・准教授
研究者番号：00735623

ウルフ　デイビッド(WOLFF, David)
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授
研究者番号：60435948

シュラトフ　ヤロスラフ(SHULATOV, Yaroslav)
広島市立大学・国際学部・講師
研究者番号：30726807

宮沢　正典(MIYAZAWA, Masanori)
同志社大学・高等研究教育機構・嘱託研究員
研究者番号：40125117